
魔術学園魔工科の問題児《トラブルメーカー》

冬澤雪斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術学園魔工科の問題児^{トラブルメーカー}

【Nコード】

N6546Y

【作者名】

冬澤雪斗

【あらすじ】

異世界に転生した主人公を中心に様々なトラブルが。
「まじだりい」

主人公に平和な日常が来る日はあるのか？！（笑）

よくある転生物＆主人公チート物です。

初作品&初投稿なんで大目に見てください（＾－＾）；

プロローグ。(前書き)

修正しました(汗)

プロローグ。

ふと気がつくとそこは知らない部屋だった。

- は？此処は？ -

そう思い体を起こそうとするがまったくゆう事をきかない。

- どう言う事だ？ -

意識ははつきりしているのに言葉に乗せることが出来ない。

だんだん焦りを帯びる精神に押され口から出た言葉は

「おぎゃ〜っ！おぎゃ〜っ！」

- はっ？ -

そう意識が戸惑いつつも泣き声は収まる気配はない。

暫く呆然としつつその状態でいると

「あらあら、目が覚めたのかしら？」

若い女性の声と共に視界に人の姿が。

そこにいたのは見た目はまだ二十歳位の女性で泣いてる俺を抱き起こしあやしだした。

ふと気がつくとそこは知らない部屋だった。

訳が判らずされるが間々になっていると近付いて来る気配とともに男の人の気配が。

「どうした？」

「いえ、坊やが起きたみたいで」

「おゝよしよし。いつ見ても息子は可愛いな」

「ええ。私達の子供ですもの」

会話からするに二人は夫婦らしい。

- ……もしかしてあれか？噂の転生物？ -

愕然となり自分の意識が暗闇に落ちて行くのを覚えながら、強烈な眠気に支配されてく。

眠りに就くその直前に、誰かの声が聞こえたような気がした。

- ようこそ…アストマリスへ… -

五才になりました。(前書き)

修正しましたm(_____)m

五才になりました。

俺がこの世界に生まれて五年が経つ。

始めの内は色々戸惑ったが今は素直に受け入れ、この世界<アストマリス>に生きていく事を決めた。

この世界での名前はアストレイ・ギア・マキナ。
現在五才だ。

身長は120cm位、銀に近い灰色、右目は青っぽい翡翠色で左目は濃い藍色だ。

今はこの世界の文字を猛勉強中。

話す言葉に関しては(？)最初から判ったけど文字に関してはサッパリだった。

今は何とかカタコトで自分の名前を書ける位にはなった。

次は文章にチャレンジしようと思った矢先、

…トントン…

とドアを叩く音と共に

「アストちゃん 勉強どんな感じかなあ」

やたらテンション高めの声をかけながら入って来る人が。

振り向いた先には、見た目はまだ二十歳位身長160cm位の金髪

に少しタレ目で右目青・左目緑のオツドアイ、
元の世界だと『スーパースーパーモデルじゃんっ!』って言いたくなる様な
美人の女性が居た。

「…母様、どうしたんですか?ご機嫌なようですが?」

そうこの人はこの世界での産みの親であり名前はアリーシャ・ギア・
マキナである。

「んっふっふっ …じゃ〜ん母特製のケーキを焼いてみましたー
緒に食べましょう」

「…(ハア)判りました。」

内心溜め息を尽きながら笑顔で答える。

この母親は少しの事でも拗ねるので大変なのだ。

まあ料理はものすごく上手いので失敗とかは無いと思うけど…。

「そっといえば、父様は?」

文字の勉強をしていた本を閉じ、片付けをしながら聞いてみる。

「んっ…、ダーリンは工房かしら?」

「判りました。母様とケーキ食べたなら父様にも持っていきますね。」

そう笑顔で母親に告げると一緒に居間へと向かった。

母様とケーキを食べ終え残りを家の隣にある工房まで運ぶ。

そして入口に入り奥に向かい

「父様へ居ます？」

大きな声で声をかけた。

「おゝ少し待て！！」

そう返事が返って来たので暫しその場で待つ。

約10分位待っていると奥から人の気配とともに男の人が出てきた。

見た目は30才位、身長190cm前後の大柄で、髪の色は黒に近い藍色に深い翡翠色の瞳、

十人中八人は『絶対盗賊だろっ！』って言うくらい厳ついこの人が父親だ。

名前はヴァンガード・ギア・マキナ。

「アストか。一体どうした？」

「母様が作ったケーキを持ってきました！」

俺は笑いながらお盆を差し出す。

それを受け取りカウンターに置いた後、いきなり俺を抱き上げほお擦りしながら

「くうっ！やはり俺の息子！この歳で勉強もちゃんとしてお手伝

「いまで！！可愛いな」

「父様！お髭痛いっ（笑）」

「おっと、すまん。」

笑いながら言う俺の言葉に対し謝りつつ降ろしてくれた。

「この親バカぶりはどうにかならないかな……」

何時もの事ながら内心疲れつつも笑顔を崩さず辺りを見回す。

棚に飾られているのは、元の世界のゲームや漫画等でみた剣や鎧、装飾品などが飾られている。

それらは全てこの父親が作った物だ。

家は代々続く魔工職人の家で父親で八代目。

俺はその跡取りになる予定らしい。

そんなことを考えつつ父親に視線を向けると持ってきたケーキをパクついている所だった。

「……父様、後で作業見ても良いですか？」

俺の必殺、幼児の微笑み《エンジェル・スマイル》と共に父親に話しかける。

「……アスト、本当に可愛い息子だ！神様ありがとう！！」

いきなりそう言うときまた抱きしめられほお擦りされた。

「父様！痛いですっ！……それで見学しても？」

「もちろん良いぞ可愛い息子よ！ただしちゃんとアリーシャにも言
つておくんだぞ？」

「判りました。」

俺を降ろし頭を撫でながら言う父親に俺も返事を返す。

そして父親が食べ終わった皿と共に、母親にその事を伝えるため、
俺は家へと走って行った。

五才になりました。(後書き)

間違いを修正しました(^ - ^ ;

工房見学！（前書き）

修正しましたm（——）m

ご指摘ありがとうございます。

工房見学！

母親から許可をもらい直ぐに父親が待つ工房に走っていく俺。

工房に着くと待っていてくれた父親と共に奥の工場に向かう。

「父様、今日は何を見せてもらえますか？」

「んゝそうだな… 鑄造や鍛造はこの前見たしな… 仕上げはまだだつたよな？」

「はい、まだ見てません。」

俺の手を引きながら父親は仕上げの工程をする作業場所へ。

俺を机近くの椅子に座らし、父親は机に向かう。

「良いかアスト、魔工職人の作った物には力が宿る。そこまでは知っているよな？」

父親の言葉に頷く俺。

「よしよし。じゃあどうやって力を宿すかと言うと… まず最初は鍛造や鑄造の時だ。」

それぞれの工程の時職人は自分の持つ最大の魔力を注ぎ鍛える。」

そう言いながら父親は鍛造し終わった剣を机の上に置く。

「アスト、この鍛え終わった品物に魔力が宿ってるのは『観て』わかるな？」

父親の言葉に頷く俺。

父曰く、代々続く魔工職人の家系、その長男は魔力を観る目を持つて生まれるらしい。

そしてその魔力を観る力によって、品物に宿る魔力を好きなように加工する事が出来るらしい。

「今机の上にある剣は魔力はあるが効果は特に無い。だがこうすると…」

そう言いながら父親は剣に細工を施していく。

「とまあ、魔力の塊をどういった物へと変えて行くかはこの細工である程度決まる。」

そう言いつつ見せてもらった剣はさっき迄とは雰囲気が違う。

「アスト、この剣の効果が何か判るか？」

「んと…持ち主に対する力と速さの加護？」

父親の問題に答える俺。

「そうだな。持つ者の筋力と速力を上げる。よく判ったな。」

俺の頭を撫でながら父親は誉めてくれた。

「普通は『観た』だけじゃ判らないの？」

頭を撫でられつつ聞くと効果が判るのは作った職人本人か鑑定の魔術を使える人だけで、俺の様にただ『観た』だけで品物の効果が判る人はまず居ないらしい。

「アストは凄い才能を持っているかもな。でも人前でその事を言わないように。」

「なんでですか？」

父親の注意に首を傾げながら聞くと、その力を狙って誘拐されるかもと言われた。

「まあ、うちのアストに手を出そうとする奴は俺が切り刻むけどな」

笑顔で物騒な事を言う父親に引きつった笑いを浮かべる。

父親の仕事を側で見つつ色々質問していたら夕方になっていたらしい。

母親が呼びに来て今日の作業は終わり三人で家に帰る。

そして、その日の夕食の時にも同じ様な会話を両親が話しているのを聞きつつ、自分の持つ力の事に頭を悩ますのだった。

工房見学！（後書き）

次はもう少し見直ししなきゃ（汗）

ハ才になった。(前書き)

誤字・脱字等有りましたらご指摘よろしくお願いいたしますm
|) m

ハ才になった。

あれから三年が過ぎ現在ハ才。

背も少し伸び130cm位になった。

去年辺りから父親の仕事を手伝いつつ店先で勉強中。

この世界<ステラマリス>は三つの大陸と一つの群島で出来ている。

俺が住んでいるのは南の大陸<フォルトヤード>にある小国デルジアの王都。

名前はそのままデルジアだ。

小国ながらこの大陸有数の魔術学園がある事で有名ならしい。

この世界の文化レベルは前の世界で中世に近い物がある。

違うのは《魔術》と呼ばれる物があり、この世界の住人なら大なり小なり使えるらしい。

後、ゲームや小説に出てくるような魔物や亜人も居るらしいがまだ見たこと無い。

- 亜人には早く会ってみたいかも -

そんなことを考えつつ勉強をしていると、店の扉が開く音がした。

「いらっしゃいます。」

そう声を掛けながらそちらに目を向けると、俺と同じ位の歳の男の子と女の子の二人。

「なんだライとミアか。」

「なんだはないだろっ！せっかく遊びに誘いに来たのにっ！」

俺の呟きに食ってかかってきた方がライ。

名前はライハルト・デルジア。

この国の末の王子様である。

身長は俺と大して変わらず130cm位で炎の様な赤毛にワインレッドの瞳。

顔は…所謂イケメン君だ。

一昨年街の祭りに参加した時、何故かお忍びで来て迷子になっていたライと仲良くなり今にいたる。

「アスト、遊びに行きましょう？」

そう声を掛けてきたもう一人の方はミール・フェルシア。
俺の幼なじみの女の子。

身長は俺より少し高く茶色の長い髪にエメラルド色の瞳。
大人からは『人形みたいで可愛い！』と大絶賛されるくらい美人だが性格は男勝りで怒ると怖い。

「ライ落ちついて…、ミア遊びに行くって何処に？」
俺はライを宥めながらミアに聞く。

「ライが面白い所に連れて行ってくれるって。」
「おう。だからアスト！早くしないと置いていくぞ？」

ミアとライが口々に言う。

「ちょっと待ってて、父様に聞いてくるから。」

俺は二人にそう言ってから父親に許可をもらい三人で工房を後にした。

街の大通りに出てからライに向かう場所を聞くと、

「着くまで秘密だ！」

と言い切られミアと顔を見合わせた。

しばらく進み着いた場所は、街の中心に近い所にある大きな建物。

「なあライ。此処ってもしかして……」

「そうだ！我が国が誇るデルジア魔術学園だ！」

そう胸を張るライに呆れた視線を投げかける俺とミア。

「ライ？それは判ってるけど、私たちはまだ入学してないし入れないわよ？」

「そうだよ。それに勝手に入ったらやばいよね？」

俺とミアがそう言つと

「大丈夫！父上に頼んで今日見学させてもらえるようになってるし！」

そうライは言い放ち勝手に門を潜る。

俺とミアは慌てライの後を追うと学園の入口辺りで警備の人に止められた。

「こらっ！此処は子供が来る所じゃないぞ！」

警備の人にそうわれ俺とミアがオロオロして居るとライは、

「許可は取ってある！」

そう言い放ち警備の人に何かを見せていた。

それを見た警備の人は冷や汗をかきはじめたかと思うと、いきなり敬礼をし

「しっ、失礼致しました！どうぞお通り下さいっ！」
そう言い固まっている。

「判ればいい。ほら、二人とも固まって居ないで行くぞ！」

ライはそう言い放ち先に進んでいく。

「ちよっ…ちよっとまってよ！」

我に戻ってミアと二人、ライの後を追いかけた。

追いつきライにさっき何を見せたのか聞くと、

「ああ、父上直々に貰った許可証だよ」

と笑いながら答えるライ。

・流石、この国の王子…凄いな…

目の前を歩くライを見ながらそんな事を思っていると、目的の場所に着いたらしくライとミアが立ち止まる。

俺も慌てて二人の側に行くと

「さて、二人を連れて来たかったのは此処なんだ。」

ライがそう言いながら開けた場所は、扉の上に魔術訓練室と書かれている部屋だった。

三人で中に入るとそこは訓練中らしい学生30名と指導員らしい大人二人、更にそれを見ている老人が一人居た。

その場に居た学生や指導員達はいきなり現れた子供三人（俺達）を見て驚いていたが、ライは気にせず老人の元に近寄っていく。

俺とミアもライに着いて行き老人の前に行く。

そうしている時、我に返った指導員の一人がこちらに近付き

「君達っ！何処から来たんだ？此処は危ないから今すぐ出て行きなさいっ！」

そう叫ぶがライは気にせずに居ると老人が指導員に話しかける。

「かまわんよ。この子達はワシが呼んだんだ。」

「しかしっ…」

何か言いかけた指導員に対し近付き話し込む老人。

俺とミアはそれを見てライに小声で聞く。

「なあ、あのお爺さんだれ？」

「ああ、この学園の学園長だよ。」

「……はあっ?!」

俺とミアの驚きの声が重なった。

ライはそんな俺達の驚いた様子に満足したらしく

「今日は二人を学園長に紹介したくつてな!」

あっけらかんと笑いながら言うライを見て俺とミアは呆れ顔になる。

この王子、思い付きで俺とミアを連れ周り驚かすのが趣味らしい。

「ライ、毎回毎回私を巻き込まないでよ……」

「そう言つなミア。俺は二人共に色々見て知ってもらいたいだけだ!」

ミアの言葉に慌てて取り繕うライ。

そこに指導員と話し終わつた学園長がやってきた。

「お久しぶりです。ライハルト様。」

「ああ、学園長も元気そうで何よりだ。」

「所で今日は紹介したい者が居ると聞きましたが？」

学園長がそう言いながらこちらを見てくる。

「この二人を紹介したくつてな。アストレイ・ギア・マキナとミー

アル・フェルシアだ」

ライの言葉に俺とミアは慌ててお辞儀をする。

「…ギア・マキナと言えば確かこの街一番と言われる魔工士の名でしたな」

「アストはそこの一人息子さ。」

「そちらのお嬢さんのフェルシアと言う名は確か……」

「流石、デルジア魔術学園学園長殿、判るか？」

「…ええ、フェルシアと言えばこの国の騎士団長の名と同じですからな。」

ライと学園長の話しについていけず顔を見合わす俺とミア。

「…ねえ、アスト……」

「…ん？」

「私達…どうすれば良いのかな？」

「…わかんない……」

そんな俺達を置いて話し込むライを見ながら途方に暮れるしかなかった。

しかし、このあと大変な目に遇う事を俺達は知る由も無かった。

ハ才になった。(後書き)

次なるべく早くアップ出来るように頑張ります(汗)

勝手な事を…（前書き）

m 誤字脱字等ありましたらご指摘よろしくお願いいたします m（――）

勝手な事を…

学園長とライの話しが終わったらしく、改めてお互い自己紹介すること。

「アストレイ・ギア・マキナです。」

「ミール・フェルシアと申します、学園長様。」

「うむ、私はラウド・ウイズ・レイティス。この学園の学園長を任されておる。」

学園長…ラウド様と挨拶が終わるとライが

「此処じゃ何だし…学園長の部屋へ。」

とラウド様を促す。

それを見て俺とミアは首を傾げていると、それに気付いたライが

「まだまだ秘密だぜ？」

そうおどけながらも俺達を引っ張って行く。

訳が分からずなすがままの俺とミアを見るラウド様の顔は、微笑みと苦笑の間の様な表情だ。

そして、連れて来られた場所は学園長室。

ライは慣れた様子で部屋のソファーに座り、俺達も戸惑いつつ一緒にソファーへ腰掛ける。

向かいにはラウド様が腰掛けこちらを見ている。

「ライ…そろそろ訳を話してよ。」

「そうですね！いきなり学園に連れて来た訳を話してください！」

俺がライに詰め寄るとミアも若干怒り気味にライを問い詰める。

「あゝ…実は来年、此处に入学する為の試験を受ける様に言われてな。」

ライの話によると、国王様がライにこの学園に入学するように言っ
て来たらしい。

確かこの学園の入学可能年齢は9才から15才までの間と決まっていた
し来年なら入学出来る。

「俺は本当は嫌なんだけどしつこいから受けるに当たって条件を出
した。」

「…条件？」

「ああ…アストとミアと一緒に入学試験受けるならオツケーで
感じて…」

「「……はあっ?!」「」

ライの言葉にハモった俺とミア。

「ちょっとライっ！いきなりまた勝手なことを！」

「スマン！」

ライとミアのやり取りを俺は呆れた顔で見ている。

「ああまた面倒な事に…縁切ろっかな…」

「ちよつとアスト！聞いてるの！」

ミアに耳元で怒鳴られ我に返るとライはミアに首を絞められている所だった。

「…ゴメン。考え込んだ。てかミア、ライが落ちるから！手を放して！」

俺の指摘に慌ててミアが手を退けると咳込むライ。

「…ゲホッ。あゝ死ぬかと思った…」

「…ライは一回ちゃんと説教するからね。」

咳込むライにジト目で俺は釘を刺す。

「ホッホッホッ、仲がよろしいですな。」

今まで俺達の様子を見ていたラウド様がそう声を掛けてきた。

「…とりあえずミア座つて。ラウド様…ライの言ってる事なんです
が。」

「ああ、その事に関しては既に国王様から手紙を頂いておる。ただ
本人達の意見を聞かんと話しが出来んと思っておつてな。」
俺の問いにラウド様が答えてくれる。

「では、二人の意見を聞こうかの。まずミール・フェルシア嬢、
そなたはいかが致しますかな？」

ラウド様の問いに考え込むミア。

「……正直いきなりの事なので時間が欲しいです。父上達とも相談したいと思いますので……」

ミアの言葉に頷くラウド様。そして今度はこちらに視線を向けると

「では、アストレイ・ギア・マキナ殿そなたの意見は？」

ラウド様の問いに俺も考え込む。

少し考えた後、俺はラウド様に顔を向け

「…俺としては学園に入りたいと思ってました。ただ、それはもう少し先の予定と思っていたので、今回の話しには正直戸惑っています。」

俺の言葉にラウド様は頷きながら目で先を促す。

「今回の事はライ…ライハルト様の独断で俺達の未来を決めるような事なので、正直頭にきていますが…とりあえず両親と相談して決めたいと思っています。」

俺はライを睨みつつラウド様に意見を述べた。

「ホッホッホッ。お二人共の意見、特にアストレイ殿の意見には私も賛成ですな。」

「むう…」

ラウド様の言葉に唸るライ。まあ自業自得って事で放っておく。

「ではまずお二人はご両親と相談なされ。それから後日、そうですね…一週間後に此处で、来年の試験を受けるかどうか話しを聞きますかな。」

「判りました。」

「よろしくお願いいたします。」

「……………はあ……………」

上から順に俺・ミア・ライの台詞。

落ち込むライにラウド様は

「ライハルト様。今日話した内容を纏めて国王様宛ての手紙を出しますので、ライハルト様も国王様とよく話し合ってきて頂けますかな？」

そう促すとますます落ち込むライ。

「まあ仕方ないか…学園長よろしく頼む。それじゃ俺達は帰る。」

ライは、まだ若干落ち込んでいるものも頭を切り替えたらしくそう学園長に頭を下げ部屋を出ていく。

俺とミアも慌ててお辞儀をしてライの後を追った。

その後は、学園を出て大通りにあるカフェに寄り、ライに俺とミア二人で1時間近く説教をし家路に着いた。

家に帰り着いた時には既に夕食の時間になっていて、夕食を食べながら今日の事を両親に話してみた。

「……と言つ訳なんだけど…父様と母様の意見は？」

「んゝアストちゃんが受けて見たいなら私は応援するわよゝ」

「そうだな、アストは同年代の子達よりも賢いし大丈夫だろう。」

「そうよね うちのアストちゃんは貴方みたいに頭良いしゝ」

「なにを言つ、賢いのはアリーシャに似ているからだよ」

「貴方ゝ」

「アリーシャ」

「…何だろう、反対されると思つていたのに。」

この両親は軽い感じでオツケーするとは…てか何時の間にかイチヤついでるし……」

俺を横にイチヤついでる両親に対して、内心頭を抱えつつこっそり溜め息をついたのだった。

勝手な事を…（後書き）

次は入学試験までいけたら良いなと思っています（^-^）；

返答（前書き）

誤字・脱字等ありましたらご指摘よろしくお願いいたしますm（
|）m

返答。

魔術学園でラウド様と話してから一週間がたった。

今は俺・ライ・ミアの三人で学園に向かう道の途中だ。

俺は会うなりまず、両親の反応と入学試験を受ける事になった事を告げた。

ライとミアは予想していたらしくさほど驚きもなかった。

その後は歩きながらミアの方はどうだったのか聞くと、

「……てことがあったのよ……。」

「……大変だったね」

ミアの説明だと、あの後両親に相談すると父親でデルジア騎士団の団長サファルス・ブロード・フェルシア様から猛反対を受けたりらしい。

頭に来たミアは、思わず父親を殴り飛ばし（ミアは見掛けに寄らず大人顔負けの怪力を持つてる……）

その後、悶え苦しむ父親相手に説教（脅迫）をしながら説得をして学園の入学試験を受ける許可をとったとの事。

「今さらだけどミアを怒らせないようにしよう……」

「ああ……じゃないと死ぬ……」

ミアの説明を聞き俺とライはアイコンタクトで語り合った。

「どうしたの？二人とも顔色悪いわよ？」

「なっ、なんでもないよ?! そっ、そうだ! ライの方はどうだった?」

俺達の顔色を見て訝しそうにして聞いてきたミアの意識を逸らすため、ライに慌てて聞く。

「…父上に丸め込まれた…」

ライの話によると、その日の夜に学園長の手紙を見た国王オルフ・エイト・ソル・デルジア様の部屋に呼ばれ、俺達の意見を聞いていないばかりか勝手に交渉材料にしたことを約3時間近くに渡って説教され強制的に入学試験を受ける事になったらしい。

「…まあ…自業自得?」

「確かに…ライが悪いんだしね。」

「……そりゃないだろ……」

俺とミアの台詞に更に落ち込むライ。

そんなこんなで学園に着き、受付の人に約束の事を告げるとそのまま学園長室まで案内をされた。

学園長室に通された俺達は、ラウド様が来るまで待っているように

言われソファ―に座り大人しく待つ。

しばらくして学園長であるラウド様が部屋にやってきた。

「おお、三人ともよくきなさった」

「「「こんにちは。」」」

ラウド様の挨拶に声を揃えて返す俺達。

「して、それぞれの返事を聞こうかの。…ああライハルト様は受けるのでしたな。」

「なっ…！学園長何故それをつ！」

「昨日の昼に国王様から手紙を頂きましたな。そこに『ライハルトはそちらの入学試験を強制的に受けさせる。』と書いてありましてなあ。」

ラウド様の言葉を聞き、うなだれるライを置いて俺とミアは試験を受ける事を告げた。

「ウム。こちらの良い返事を頂けて有りがたいわい。何せ称号を持つ家系の者が一度に三人も入学すれば、この学園も賑やかになるうて。」

ラウド様の言葉に俺達三人は首を傾げる。

ラウド様は称号についてこう語った。

称号とは、それぞれの分野で一番の実力者に与えられた印であり力だと言う。

例えばミアの家の場合は父親のサファルス様が騎士団長になった時に『ブロード』の称号を前騎士団長から引き継ぎ与えられた。そして、称号を与えられた者は、名前の中に称号を加える。

例えばミアの父親だと、サファルス・フェルシアの間に『ブロード』を入れサファルス・ブロード・フェルシアと呼ばれる様になる。

普通ならミアの父親見たいにその時代で一番の実力のある人に称号が与えられ、前に称号を所持していた人はそれを返上し名前も元に戻すことになる。

ただ例外はあり、俺の家系の『ギア』なんかは父様の先祖が称号を貰い、特殊な事情で代々受け継いでいる。

その理由は直系の長男は代々魔力を『観る』目を持って生まれるため、魔道具や魔術武具の作成に関しては他の追随を許さない。

その為、此処数ギアの称号を俺の家系の長男家族が受け継ぐ事になっている。

ライの家系…つまり王族の家系にも『ソル』と言う称号があり俺の家系の称号よりも特殊だ。

起源は不明だが、この国が出来る遙か昔から受け継がれてきた物で、今の国が出来てからは国王になった者が引き継いできている。

と言う風に説明してくれたラウド様は唐突に

「そなた達みたいに称号持ちの家系の子供が同い年で揃うことが、今まではなかったのだな。三人には期待しておる。」

そう告げられると席を立つ。

「あっ、ラウド様今日はありがとうございました。入学試験の時はよろしく願います。」

慌てて立ち上がりお礼をする俺に慌てた様子でライとミアも立ち上がりお辞儀をする。

「ホッホッホッ。こちらこそ来年の入学試験楽しみにしておりますぞ。」

そうラウド様は答え部屋をあとにした。

ラウド様との話しを終えて学園を出た俺達は一先ず近くにあるカフェへ向かい飲み物を頼んだ。

「それにしても…入学試験って何するの？」

注文したジュースが来て一口飲んだ後、唐突にミアが聞いてくる。

「…確か筆記試験と自分が受けたい科目の実技だったと思う。」
「へえ、もう調べてあるんだ？」

ミアは驚きつつ俺の話しに問いかけてきた。

「まあな。所でライとミアはどの学科を受けるつもり？」
「もちろん、俺は戦術科だ。」

「私は魔戦術科かな、アストはやっぱり魔工科？」「うん。まあ俺にはそれしか思いつかないし」

俺はそう答え手元のコーヒーを飲み干しミアに聞いてみる。

「まあライは毎日お城で剣術や魔術の訓練してるから大丈夫だと思うけど……ミアはどうなの？」

「私もこう見えて剣術と魔術はお母様に教えてもらってるわ。」

「あゝケーナ様か。なら問題無いか（笑）」

「俺はケーナ様苦手……」

ライの苦手なケーナ様とはミアの母親のケーナ・フェルシア様の事だ。

ケーナ様は元騎士団副長を勤めていた女傑で格闘技・剣技と魔法を組み合わせた魔闘戦技マギ・アーツの使い手だったらしい。

前にライと二人でミアの家に行った時、ライをミアの彼氏と思い込み暴走しかけたサファルス様をその力で止めて（殴り飛ばして）いたのを見たことがある。

ライはどうやらその時の事がトラウマになっているらしくケーナ様に苦手意識を持っているらしい。

「あの時はライ大変だったもんね（笑）」

「笑い事じゃね〜！」

「ライものすごく怯えていたものね（笑）」

ライの叫びに俺とミアは笑い声を上げていた。

その後、二人と別れ家に帰ると父様から話があると言われ工房へ向かう。

「アスト、魔工科を受けるんだな？」

「はい、そのつもりです。」

そう父様の問いに答える俺。
それを見た父様は一つ頷き、

「わかった、なら明日から来年の試験日までみっちり特訓してやる。」

「父様：よろしく願います！」

そう告げる父親に対し深々とお辞儀をする俺であった。

返答。（後書き）

中途半端になるので入学試験まで行けませんでした（^-^）；

入学試験までに後一〇二話物語りを入れようと思ってます。

厄介事…（前書き）

誤字・脱字等ありましたらご指摘よろしくお願いします。

厄介事…

学園の入学試験を受けることになってから半年が経った。

俺は父上の元、魔道具作りに関しては一通り教えてもらい、その総決算として魔道具作りをしている所だ。

「ああゝ、失敗した！」

今作っていたのは俺用の腕輪型魔道具だったのだが、魔力回路を兼ねた細工に失敗してしまった。

一般に魔道具とするにはまず地金に魔力を通し整形して形を作る。そこに魔石を嵌めてからどういった効果を持たせるか細工を施し決める。

そうやって作るのだが…魔道具は魔武具と違い面積が少ない分効果の一つ、多くても二つしか持たせられないらしい。

「んゝもう少し細工を効率的にすれば出来そうなんだけど…」

そう独り言を呟きながら解体して行く。

そうしていると店の入り口に人の気配がし声をかけられた。

「おい、アストいるか？」

「…この声はライか…」

そう考えつつ入り口の方へ向かう。

奥の工場から顔を出すと俺の姿を見つけたライが近寄って来る。

「やっぱり此処にいたか。」

「さっきまで魔道具作ってたから。…で、どうしたんだその恰好は？」

俺の疑問の通り、いつもの動きやすい平民用の服じゃなく、冒険者達が着てる様な丈夫な服の上に左側に肩当ての付いた硬革「ハードレザー」の胸当て、背中にはロングソードを担いでいる姿だった。

「まるで駆け出し冒険者だな（笑）」

「煩い！…魔物狩りに行く事になってな。」

「はあ？一人で行くのか？」

「いや……一人じゃないけど……」

ライの歯切れの悪い返答に嫌な予感を覚えた俺は先手を打つ為行動に出る。

「悪いけど俺は無理！忙しいから。」

そう言い放つ俺に

「…スマン。もう決定事項なんだ…」

「……はあ?!」

俺の驚く声にさもすまなさそうにライは

「…父上とアストの親父さんが昔、一緒に冒険者してたの知ってるだろ？」

「…それは知ってる。」

「んで、この前城に来た時に昔話しに火が付いた挙げ句、話しの流れで俺達に魔物退治をさせる話しになってな…」

確かに、父上が少し前に城へ納める為の魔道具や魔武具を持って行き上機嫌で帰って来ていたが。

「…俺、何も聞いてない…」

「マジか？」

「うん。…ライ、ちょっとだけ店番良い？父様を問い詰めて来る…」

「あつ、ああ良いぞ。」

俺から立ち上る黒いオーラに気付いたライは若干引きつつも頷いてくれた。

「悪いな、後頼む！」

そう言い残し俺は父上の元に駆け出した。

S i d e ミ ア

今日も何時もの日課で、私は庭先にある練習場に来ていた。

剣の基礎練が終わり次は魔術の基礎練に移ろうとした時、門を勢い良く潜る人影を見つけた。

「……アスト？」

良く見るとそれは幼なじみのアストだったが、その表情は、若干怒りの成分が滲み出てる様だった。

「……またおじ様絡みかしら？」

そう思いつつ面白そうだと思いアストの後をつける。

アストは気付く事もなくお父様の書斎へ。

今日は朝からヴァンガードおじ様が来てお父様の書斎で何か話し込んでいたはず…。

- やっぱりおじ様絡みかな -

そう考え見つからないように近寄って耳を澄ますとアストの怒った声が聞こえてきた。

「父上！ライに聞きましたっ！何勝手に国王様と話しが盛り上がった挙げ句、俺とライに魔物狩りへ行かせようとしてるんですかっ！」

- 魔物狩りですって？ -

アストの発言に私は驚きつつも様子を伺う。

「アストっ！落ち着きなさい。確かに伝え忘れた私が悪いが決定事項だからな。」

「何が決定事項ですかっ！いい加減に息子の迷惑になる事位学習してくださいっ！」

「しかし…」

「しかしじゃありませんっ！毎回毎回同じ事言わせないでくださいっ！いい加減にしないと暫く口も聞きませんよ！」

「っ…。それだけはっ！それだけは勘弁してくれっ！」

「ならちゃんと反省してくださいっ！」

アストの発言に冷や汗ダラダラなおじ様を見つつ私は考える。

- 魔物狩りか…面白そうね…私も行きたいな。 -

そう思い、どう着いていこうか考える私の後ろに気配を感じ振り返る。

そこには何時もの微笑みを浮かべてるお母様の姿が。

「ミア、どうかしたの？」

「えっ、あの…って、お母様何時からいらしたんですか？」

「アストちゃんが書斎に入った後位かしら？」

「えっ？…それでは…」

私の赤くなっていく顔を見ながらお母様は頷き

「ええ。アストちゃんをつけてる貴女を見かけましたから。面白そうなので気配を消して貴女の後ろに居ましたよ？」

「なっ……………」

にこやかに笑顔で言われると返す言葉が出てこない。

「…ミア、ケーナ、二人とも入ってきなさい。」

更に顔が赤くなるのを感じていると書斎からこちらを呼ぶお父様の

声が聞こえた。

「わかりましたわ貴方、さっミアも行くわよ。」

「…わかりました。」

お母様の声にも私も落ち着きを取り戻し後に着いて書斎へ向かった。

S i d e アスト

「…ミア、ケーナ、二人とも入ってきなさい。」

書斎へ入るなり父上を叱りながらも魔物狩りを回避するために頭を巡らせていると、ミアの父親であるサファルス様が唐突に声をかけた。

「…？」

その声に疑問を浮かべ入り口を見る。

そこにはケーナ様と若干顔が赤くなっているミアの姿があった。

「ケーナ様とミア…。なぜこちらに？」

「アスト…気付いてなかったのか？」

「アスト君…ミアは君の後をつけて来てたみたいだよ？まあケーナはそれを見て面白そうだと思いき配を消してミアの側に居たみたいだがね（笑）」

俺の問いに父上とサファルス様が答える。

「…うそっ！ミア…本当なの？」

俺の言葉に恥ずかしそうに頷く。

「まあそれは置いて、サファルス、ついでだからお前の所のミアちゃんも一緒に魔物狩り行かせないか？」

行きなり言い放った父上の言葉に俺は睨みつけ

「またかつ「良いわよ」……」

俺の文句の途中でケーナ様がそう答えた。

「…もう無理だ…ケーナ様の決定なら逆らえない…」

俺がそう考えながら意気消沈していると

「私は反対だっ！！可愛いミアに危ない事はさせない！」

サファルス様が声を荒立て反対しだした。

しかし、ケーナ様がサファルス様の側に行き耳元で

「貴方…わがまま言うならお仕置きです。」

その一言でサファルス様の様子が一変し顔色が青くなる。

「…くっ。しかしミアが怪我したらどうする！」

「怪我位ならミア一人でも治せます。誰がミアに剣と魔術の手ほどきをしてると思ってるのですか？」

「だがっ……」

「黙りなさい。」

更に言い募ろうとしていたサファルス様の首に細指をかけ一瞬で絞め落とす。

白目を剥いたサファルス様を椅子に座らせケーナ様がこちらを向く。

「……ケーナ、相変わらずだな……」

「ふふっ、昔もこんな感じでしたね（笑）」

「お母様……どう言う事ですか？」

父上とケーナ様の話しにミアが割って入る。

「あら？話してなかったかしら？私とサファルス、アスト君のご両親、それと国王様と王妃様は若い頃は冒険者として旅していたのよ？」

「……は？」

「そうだったな。当時からサファルスが何かしでかすとケーナが絞め落としてお仕置きしてたし（笑）」

「……お母様……」

「……父上……もう良いです……」

ケーナ様と父上の話しに脱力感を覚えながらなんとか声を出した。ケーナ様は俺達の様子を気にせず話を纏め出す。

「って事で、ミアも準備有りますし予定は明日に致しません？」

「そうだな、アストも準備してないようだし。そういえば……アスト店はどうした？」

「あっ！ライに店番たのんだままだった！」

父様の声に気を取り戻した俺は慌てて店に戻って行った。

店に戻るとそこには眠たげな表情のライがいた。

「ふぁゝ… やつと帰ってきたか…」

「ライ、店番頼んでごめん！」

「まあ暇だったしいいさ。で、親父さんとの話しはどうなった？」

謝る俺にライが状況説明をするように言ってきたので、ミアの家であつた事を話した。

「……と言う訳で魔物狩りは明日、俺とライそれにミアの三人で行く事になった。」

「まあ… ケーナ様がそう言うなら仕方ないな。しかしケーナ様達も親父と一緒に冒険者してたとは…。」

「ビックリだよね…。とりあえず明日、今日店に来た時間にまた来て。」

「了解！」

俺の言葉に頷きライは帰って行った。

それを見送りつつ店を閉め、明日に備えて色々準備を始める。

「翌日。」

「…はあ、全く面倒な事になった…」

今日何度目になるのかわからない溜息をつく。

俺は、店の中で昨日準備した物を装備しながらライが来るのを待つ。

今の格好は動きやすい上に丈夫な布でできた服に父様が作ってくれた行動＆移動補正の付いたブーツ。

服の上から物理防御と魔術防御の付いたローブと同じ補正の掛かったフード付マント。

腰には母様が昔使っていたと言うショートソード。

手には自分で作った魔力補正のある指輪と同じく魔力補正のある杖。完璧に魔術師の格好になっている。

「…まあこんなもんかな。」

そう呟きながらもう一度装備の点検をしていると

「うーす。アスト準備出来てるか。」

ライがそう言いながら店に入って来た。

「ああ、おはようライ。」

「おう。にしてもアストの格好……ぷっ」

「笑うな！仕方ないだろ、ライやミアみたいな前衛なんか俺には無理なんだから！」

俺の格好を見て笑うライに怒鳴りながら最後の確認を終えた。

「わりい、準備はオツケーか？」

「良いよ。」

「んじゃミアを迎えに行くか。」

「了解。」

そう言いながら二人で店を出る。

家の前に差し掛かると母様が立っていてこちらを見つけるなり小走りで近付いてきた。

「二人ともまだ居たのね、よかったわ。」

「おばさんおはようございます。」

「ライちゃんおはよ。」

「…母様どうしたんですか？」

ライと母様が挨拶をしている横で俺がそう聞くと

「アストちゃんにこれを渡そうと思って待ってたの。」

そう言われ差し出されたのは、俺には少し大きめの革製のリュックだった。

「母様これは？」

「それはね、昔冒険者していた時に見つけた魔法のリュックよ。」

母様の説明によると中は別の空間になっているようで、リュックと幅が同じ位大きさの物なら何でも入るらしくしかも容量は無限に近

いらしい。

「そんな良い物貰っていいの？」

「可愛いアストちゃんの為だもの 取り出す時は手を入れて、取り出したい物を思い描きながら引き抜けば出せるわよ」

「母様：ありがとうございます！」

「おばさんサンキュー！」

俺とライは母様にお礼を言って改めてミアを迎えに向かった。

屋敷に着くと門に背をつけてるミアが待っていた。

「お待たせ。」

「おっす。」

「二人とも遅いわよっ！」

俺達の言葉に怒った物言いでミアが近付いて来た。

ミアの格好は丈夫そうな服とズボンの上に急所や間接を守る感じに硬革のプロテクターを着け、腰には二本のショートソードを左右にさげている。

両手にも硬革でできた籠手みたいなグローブをしていた。
よく見ると所々金属で補強してあるらしい。

「なんかミアの格好も凄いね。」

「アストこそ、何その格好（笑）」

「…つるさい！」

俺がミアの格好をみて唾然としていると、ミアもこちらを指差し笑い始める。

それにむくれているとライがミアの腰の剣を見ながら

「てかミア、剣を二本も使えるのか？」

「アハハっ……えっ？ああ私は両手利き腕だし。」

「スゲーな。流石ケーナ様が教えてるだけある。」

ミアの答えに感心しているライ。

そんな二人を見つつ

「…ったく…。で？ライこれからどうすんの？」

「ああ、そう言えば二人とも親から何か預かってないか？」

ライの問いにミアが

「ええ、家を出る時お母様から何か封筒を預かったけど。」

「…俺も父様から昨日の夜に封筒みたいなの預かった。」

俺達の答えに満足した様な顔でライが頷くと

「よし、なら大丈夫だな。とりあえず今から冒険者ギルドに向かうぞ。」

そう言い放ち先に進んでいく。

俺とミアはお互い顔を見合わせ、慌ててライの後を追いつけて行った。

厄介事…（後書き）

次は魔物狩りでの戦闘まで書けたらと思います。

良ければ感想等もお待ちしてますm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6546y/>

魔術学園魔工科の問題児《トラブルメーカー》

2011年11月29日20時52分発行